

コロナ禍だからこそ、考えなければいけない課題を、 素晴らしい講師陣をおまねきして、 コロナ禍だからこそその形で、「教育講演会」連続講座を開催します!!

大きな災害や政変、経済の急速な悪化など、予期せぬ出来事で社会が揺さぶられる時、普段はあまりはっきりとは見えない、その社会の負の部分のクローズアップされることがあります。例えば、東日本大震災と原発事故においても、都市部の陰となる地方の問題や、企業と社会の利益相反の事実などが浮かび上がりました。結果、復興は様々な壁に直面していますし、原発には依然汚染水がたまりつつあり、帰宅がまだ許されない放射能汚染地域の除去も未だ変わりません。。。。。

現在進行しつつある新型コロナウイルス感染症の拡大においても、世界、そして日本社会はその弱点を露わにしています。それはまるで、地殻変動でずれた地層が私達の目の前にあらわれたようです。普段我々が直視せずに済ませている部分まで、はっきりと見える姿で迫っています。

コロナウイルス感染拡大という「災害」が進行しつつある状況であるからこそ、教育においても、今考えておかなければならないことがあるはずで、特に、弱い立場にある子どもたちの言葉を代弁することが、今必要だと思うのです。

こうした問題意識から今年の教育講演会は、現在課題とすべき視点を整理し、リモートでの連続講座を企画いたしました。そして講演会の間に企画した座談会では、学校の先生方にも参加いただき、現場の声も届けていきます。講演は、一流の講師陣をお願いいたしました。たくさんの方の参加をお願いします。以下、それぞれのテーマとなることをまとめてみました。

10月24日 座談会 「教育の不平等と学校の役割」

今回の連続講座のスタートでは、これから始まる議論や講演の前提ともなる「子どもたちが体験している不平等や格差の実相」を整理します。国際比較の中でも高い率を示している子どもの貧困や、外国につながる子どもたちが出会う生きづらさ。インクルーシブが叫ばれつつも、その一方で進められる障がいのある子どもたちへの分離的な指導。格差が拡大するとともに、隣の人との分断が進行しているのが現状です。コロナ禍により、ますます進む可能性のあるこうした不平等や格差を、私達はまずは確認するところから始めなければなりません。

また一方、こうした状況に知らず知らず「手を貸している」学校という存在、そして教職員の意識そのものを、突き放した視点で振り返る覚悟なしには、辛いことですが、可能性のある学校論を展開することはできない所まで来ていると思うのです。その上で、学校に何ができるのか?という問いに、少しでも答える努力をしたいと思います。

日本女子大学 清水睦美教授をナビゲーターに、教育現場の先生方を交えて議論していきます。「子どもの現実と学校に期待すること」を、実態に迫りながらも正面から話し合いたいと思います。

11月15日 講演会 「教育においてICTを飼いならすために」

3月の全国一斉臨時休業によって、教育現場はすべての教育活動が停止され、全くの真空状態となりました。何を考えたら良いのか、子どもたちに必要なのは学習なのか、心のケアなのか、その手立ては?入口も出口もよくわからない中、それでも、どこの学校現場も試行錯誤のなか、様々な取り組みを行いました。

しかしそうしたさなかにマスコミでもはやされたのは、「リモート授業」でした。リモートに取り組む学校の実践ばかりが紹介されていたように思います。そして、学校が再開されると、国からは「今年度中の一人一台端末の導入」が伝えられました。もちろん、ICTが教室に導入されることは様々な可能性を生み出します。先生方の仕事が軽減されることもあるでしょう。しかし、気になるのは今回の休業での語り口に代表される「ICT万能論」です。加速度的に進むICTの導入に対し、学校現場ではどのように捉えていったら良いのか、その可能性は認めつつもちょっと冷静になって、ICTの良い点も悪い点も、整理しておく必要があるのではないのでしょうか。

京都大学大学院 石井英真准教授による講演会です。

12月26日 講演会 「なぜ、少人数学級が必要か」

講師である本田由紀教授（東京大学大学院）は、著書『教育は何を評価してきたのか』（岩波新書）で、他の諸国との比較において、「異常に高い一般スキル、それが経済の活力にも社会の平等化にもつながっていない異常さ、そして人々の自己否定や不安の異常なまでの濃厚さ」を日本の現状として指摘している。そしてその要因として、「日本における、人間の『望ましき』に関する考え方は、歴史的な軌跡の中で、垂直的序列化と水平的画一化の独特な組み合わせを特徴とするシステム構造を展開する形で、普及拡大を遂げてきた。」と分析している。そして、垂直的序列化においては、「日本型メリトクラシー」と「ハイパーメリトクラシー」の両軸による展開を考証し、水平的画一性においては、道徳の教科化などに「ハイパー教化」を論証している。それらの手がかりとなる言葉が、「能力」と「態度・資質」である。そしてこうした考察を経て、本田氏は現在の状況に変化を与える出口として、「水平的多様化」を提起している。

現在「少人数学級」に関しては、文部科学省もその実現を掲げ始めたが、それが単に「効率」や「個別化」のためであってはならない。学校現場も望んできた「少人数学級」にどんな可能性を見出すのか。日本の学校と社会が歩んできた序列化と画一化の軌跡を振り返りながら、少人数学級制度に「水平的多様化」につながる可能性を見出していきたいと考えます。

2021年 1月23日 座談会 「偏見・差別・自粛警察を考える」

コロナ禍での日本社会の出来事でもっとも気になるのが、感染者へのバッシングだ。家に石が投げ込まれたり、張り紙を貼られたり、耳にするだけで呆れてしまう出来事が当たり前のようになっていった。感染者だけでなく、看護師や保育士の子どもたちに対しても、いわれのない冷たい言葉や態度が浴びせられ、挙句の果てには相互監視を目的とする「自粛警察」と呼ばれる人々まで登場した。笑って済ますことができないこうした一連の出来事は、一体何を意味するのだろうか。

自己責任が徹底的に求められた「自粛」と、その裏側にある感染者への不当な扱い。コロナ禍で見えたこうした偏見や差別は、実は私達の社会に埋め込まれている病理なのかもしれない。加熱するヘイトスピーチやネットの炎上にも通じる、日本社会そのものに潜んでいる「偏見・差別の起動スイッチ」はいったい何なのか。それは子どもたちを取り巻く状況にもつながるものに違いない。

帝京大学 山口毅准教授に話題提供をいただき、教育の現場の視点から座談会を開きます。

2021年 2月6日 講演会 「コロナ禍で考える未来の社会と教育」

連続講座の最終回では、コロナによって見えてきた社会の実相をもとに、それではコロナ後の社会はどの方向に進めばよいのか、教育はどのように変わっていくべきなのかを考える。

2月27日に出色された全国すべての学校への一斉休業の要請は、発言力と影響力を限りなく剥奪された存在である「女・子どもへの命令」として受け取ったと、講師 岡野八代教授（同志社大学大学院）は言う。実際にその後、何よりも学校休校によってパニックになったのは、社会活動の場を奪われた子どもたちと、彼女・かれらを放ってはおけないと直感的に捉えた保護者たちであった。人生は誰かに一方的に依存することから始まる。人間は生まれてからこの世を去るまで、他者からのケアに依存する存在である。そしてまた、ケアに従事する人も、自分の子どもを他の人のケアに委ねている。

しかし、こうしたケアに繋がる仕事・・・介護や看護、農業やごみ処理、清掃業や運送業といった私達が生きることに密接に関わる不可欠な営み（エッセンシャル・ワーク）は、不当にその価値を貶められてきた。それは、こうしたケア労働と呼ばれるものを、政治権力から離れた者たちが担ってきたことでも明らかである。

コロナ禍後の未来の社会を考えると、できる限り平等で公正な形で、ケア責任を社会でどう担っていくのかという問いを、民主的な政治の中心へと位置づけることから始まるのではないだろうか。相互依存しながら織りなす社会は、新しい何かではなく、むしろこれまで人々の間で実践されてきた、他者を尊重するあり方に目を見張ることで見えてくる。

講座の締めくくりとして「ケアと民主主義」の視点から講演していただきます。連続講座を振り返りながら、お聞きください。

10月後半～11月のEd.ベンチャーの学習会

学習会は、Zoomを使ってのWeb学習会で開催しています。参加ご希望の方は、担当者もしくは事務所に連絡をください。Web会議IDとパスワード、資料の受取方について、連絡させていただきます。

理論学習会 ●11月4日（水）19時～ 事例検討会「人と制度、機関をつなげる実践」（仮）

講師：今井 伸氏（十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科教授）

授業研究会 ●10月15日（木）19時～ 内容：体験的な学習の意義を実践的に明らかにしよう

外国人の子ども理解のための学習会 事例研究会 ●10月28日19時～●11月21日13時半～

インクルーシブな社会を目指す学習会

●10月14日（水）19時～ 清水睦美企画学習会 内容：進む「心理主義化」

ー特別支援教育とインクルーシブ教育の違い

スタディツアー ●10月31日（土）14：30～事前学習会 ●11月14日（土）10：30～児童養護施設訪問

